
どんなに離れていても、ずっと

月葉抄

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

どんなに離れていても、ずっと

【Nコード】

N6994D

【作者名】

月葉抄

【あらすじ】

「え？い、今なんて・・・」平次が東京に引越す事になってしまふ。そんな時、和葉は・・・映画「迷宮の十字路」の後日談も含まれています。オリキャラあり（ほんの少し）

「え？い、今なんて・・・」

アタシは思わず聞き返してしまった。

「せやから引つ越すんや。」

平次は淡々と言う。

「せやかて、そんな急な・・・」

「仕方ないやんけ、おとんが急に東京の警視庁に異動になってもうたんや。」

何かおかしい。

平次はいきなり引つ越す事になったと言っていた。だが、それにしては家の中の物が片付いている。少しの間にここまで整理できるのだろうか？

もしかして、平次は前から知つとつたんやろか。

「平次・・・前から、知つとつたんとちゃうんか？」

「あ、あ・・・それはやな・・・」

ビンゴ。平次はもともと嘘がつけないのだ。

つつい、怒ってしまった。

「平次、何で・・・？何で教えてくれへんかったんや？」

もう止められない。勢いで言ってしまった。

「平次のどアホ！なんでもっと早く言ってくれへんかったんや！」

泣きながら一気にまくし立て、そのまま平次の家を飛び出してしまった。

後には、啞然とした平次が立っていた。

平次と離れたくない。

歩きながら、切実に思った。

わかってる。これはどうしようもないことなんやと。

蘭ちゃんかて、工藤君に半年以上あえなかつたんや。それに、平次なら会いたくなったら会いにいけるんや。

心の中ではわかっているつもりでも、アタシはどうしても辛かった。あまりにも、あまりにも衝撃的で。

「和葉・・・どうしたん？」

声の方を見ると、そこには親友の絵夏が立っていた。

「絵夏ーっ！」

アタシは絵夏に泣きながらだきついた。絵夏はすごく驚いている。

「和葉、何があつたんや？話してみ。」

「平次が・・・平次が、引越してまうんやーっ！」

「今日いきなり、引越すなんて言い出したんや。」

今アタシは自分の家にいる。そして、絵夏にあつた事を話していた。

「せやかて、平次は前から引越す事聞いたような気がしてな、聞いてみたらビンゴや。絵夏は知つとつたん？」

「知つとつたわ。でも、服部は自分で和葉に言う言つとつたさかい。もつと早く言わんかったんは、アンタの事泣かせとうなかつたんやて。」

平次が・・・？

「でもアタシ、平次が引越す言うて、すごいショックで、怒って飛び出してきたもつたんや。」

「あらま・・・」

「情けないわな。蘭ちゃんは、半年以上工藤君に会えんかったんに。」

」

「なあ和葉、その蘭ちゃんと工藤君って？」

絵夏が聞いてきた。

「東京に住んどる、アタシの大親友や。ちなみに、工藤君はあの高校生探偵で、蘭ちゃんは工藤君の彼女や。」

「ふーん・・・あつっ！そろそろ行かな、約束あつたんや。じゃあね、和葉。」

そう言つと、絵夏は急いで行つてしまった。

「はあ・・・」

ほんま、自分が情けないわ。

ピンポーン

だれや、一体。

とりあえず、玄関まで行つてドアを開ける。開けると・・・そこには平次が立っていた。

「平次？」

大急ぎで頬に残った涙の跡を拭う。

「どないしたん、平次」

つとめて平静を装おうとしたが、どうしても声が震えてしまった。

「今、時間あるか？」

「別に、大丈夫やけど・・・」

「ほな、ちよいと来いや。」

そう言うと、アタシにヘルメットを渡してきた。

「なあ平次、どこ行くん？」

「着くまでは秘密や。」

そして、バイクに乗って出発した。

「なあ平次、まだ着かへんの？」
もうバイクに乗って一時間ほどたっている。

「もうすぐそこや。」

そしてバイクが止まった。その、止まった先には・・・

『山能寺』

そこは、去年の夏蘭ちゃんたちと来た山能寺だった。

平次はすたすたと入っていく。アタシも後に続いた。

「綺麗。」

境内には、とても大きな桜の木が一本、そびえたっていた。

「引越す前に、一度和葉と見に来たかったんや。」

そう言うと、再び黙ってしまった。

平次は、何かを思い出すような、懐かしいような顔をして桜の木を見つめていた。

「平次……」

「実はな、俺が初恋の人と逢った場所、ここなんや。」

「へ？」

つい間の抜けた声が出てしまう。

「懐かしいなあ……」

平次はまだ、初恋の人の事を想い続けている。
そう思うと、心が自然と沈んだ。

「もう、ええの？初恋の人。」

「ええんや、誰だかわかった事やし。」

「誰なん？」

「そいつは幼馴染と一緒に京都に遊びに来とつてな、着物着せてもろて、髪結うてもろてちよいと化粧もさせてもろて、幼馴染の仕度が出来んのを待ちきれんかて山能寺に遊びに行つて桜の木の下で毬ついで帰つてもろたんや。しかも手毬唄の「姉さん」を「嫁さん」歌うてるん・・・もう誰だかわかるやろ？」

それつて、まさか。

「まさか・・・」

さあつ、と一陣の風が吹き、桜の花が舞い散る。

嬉しくて、嬉しくて、それでも何故か泣きたくなくなってしまった。

涙が、止まらない。

「もう、泣くことないやろ。」

平次が言った。

「和葉、ごめんな。引っ越しの事、もっと早う言わんで。」

「いいんや、もういいんや。」

アタシは、意を決した。

もう、今しかチャンスは無い。

大きく息を吸い込んで、言った。

「・・・好き。」

「は？」

「平次の事、好きや。」

「和葉。」

顔が真っ赤になるのを感じながら、アタシは続けた。

「平次は、アタシの事どう思っとるん？」

平次はあきらかにうろたえている。だが、顔を赤くして言った。

「俺も、好きや。和葉の事・・・。」

そして、しばらく二人で、桜を見つめていた。

そして、それから平次が引越すまでの間は瞬く間に過ぎていった。

駅の改札にて

「そんなに泣くことないやんけ。」

平次が呆れて言う。

「仕方ないやん・・・だって、だって、自然と泣けてまうんやもん。」

それは事実だった。

「別にええやんか、毎日電話してるさかい。それに、会いとなつたら新幹線で来ればええやないか・・・」

「・・・うん。」

「平次、お父ちゃんから電話や。ちよつと話してくるさかい、和葉ちゃんと待つとつてな。」

おばちゃんが言った。

「おう。」

アタシはふと改札の外を見た。山能寺で見た時より、桜が満開になっている。

「まるたけえびすにおしおいけ よめさんろっかくたこにしき・・・」

「

「あほ、嫁さんやのうて姉さんや。」

「ええやんけ、どっちでも・・・」

そして再び桜を見る。そうこうしている内に新幹線が来てしまった。

「ほな、もう新幹線乗るわ。じゃあな、和葉。」

「じゃあね、平次。また遊びに行くさかい・・・」

最後は笑って見送るつもりだった。でも、涙が止まらない。

平次がアタシの事を優しく抱きしめてくれた。

「平次・・・」

「平次、早よせんと新幹線乗り遅れてまうで。」

おばちゃんと言った。

平次はもう一度笑って、その後新幹線に乗り込んだ。

そして、発車した。・・・してしまった。

平次が手を振っている。アタシも振りかえした。

新幹線が、平次が見えなくなるまでずっと。

平次、大好きやで。

どんなに離れていても、ずっと。

一年後

そして一年後、東京の大学に平次と共に通う和葉の姿が見られたと
言う。

(後書き)

どうもこんにちは、月葉抄です。

映画「迷宮の十字路口」、コナンの映画の中で一番好きなんです。

今回は、新一と蘭も出すつもりだったんですが、書き終わってみると、出てなかったんですね・・・とほほ。

大阪弁、関東に住んでいるのでいまいち自信ありません。

ご意見、感想等ありましたらよろしくお願いします。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6994d/>

どんなに離れていても、ずっと

2010年10月9日03時46分発行